

第一章

——自分勝手なことをしたと分かっている。

けれど、自分がしでかしたことに血の気が引いたのだ。大好きな彼の「ファーストサービス」に惑わされてしまった。このままずぶずぶと沼に沈み込んでしまったら。私だけが、彼のことを、大々大好きになっちゃった。

それが怖くて怖くて堪らなかった。

だから離れた。彼も私のことなんて、すぐに忘れてしまおうと思ったのだ。

「来るわけないかあ」

私は自分のスマホをポイっと放り投げ、背中から革張りのソファへと倒れ込

んだ。天井に見えるのはキラキラと美しく輝く、私には似合わないシャンデリア。私が今いるのは、人生で初めて入ったラブホテル、そして数ある中で最も値段の高い「VIPルーム」と呼ばれる部屋だった。

——あの人は、殿上人ともいえるような立場になってるんだから、やつすい部屋に招待する訳にもいかない。

そんな気持ちで、この部屋をとったのだ。

「…陽夜君」

さっき放り投げたスマホに手を伸ばして掴み、撮り貯めた写真を眺める。そこには、私の大大好きな男、人気ロックバンドのベースを務める「陽夜」の写真がびっしりと並んでいた。雑誌を買いあさり、SNSを監視して集めた私だけの陽夜君の写真集だ。

「かっこいいよお…」

汗をかきながら真剣な眼差しでベースを弾く陽夜君、同じバンドの仲間と一緒に練習をしている時のリラックスした陽夜君、眠そうにあくびをしている陽夜君、こつちをうつとりする程に甘い瞳で見つめてくる陽夜君。

「……」

私は胸が苦しくなっていてまたスマホを放り投げた後、自分を慰めるように大きな声で独り言を言う。

「私の方から音信不通にしたのに、陽夜君が今更来てくれる訳ないじゃん！」
そうだ。陽夜君に連絡をしなくなったのは私の方だ。

一年前まで、私は陽夜君の非常に熱心なファンだった。初めてのライブで陽夜君の熱い音とその整った顔に一目ぼれして、ステージ前で一人、思いっきり応援しまくったのが縁で、陽夜君には「最古参ファン」として個人的に仲良くしてもらっていたのだ。陽夜君のバンドは、最初こそファンがいなかったもの

の、その確かな音楽性と演奏力、そしてバンドメンバー3人の異常に整った顔とデカイ体で、あつという間に人気バンドへの道を駆けあがっていった。

そんな陽夜君を、私は「ファン」としてそりやあもう一心不乱に応援していた。陽夜君が倒れないように、栄養ドリンクやら湿布やらを差し入れし、ライブは全通で、友人が「熱量が怖い」と引くくらいに全力で応援していた。そんな私を陽夜君は気に入ってくれて、一緒に食事に行ったり、飲みに行ったりもしていたのだ。けれど絶対にファンとしての一線を越えてはならぬと、陽夜君からいくら誘われても、必ず一次会で帰るようにしていた。それでも、模範的なファンとしての行動を貫いていたのだ。

——嘘つき。ほんととは誰よりも……。

「……」

ベッドから起き上がり、またまたスマホを手を取る。陽夜君にメッセージを送ったのは3日前。「会いたいです。ここで待ってます」とだけ送り、このラブホの住所を添付した。

——来るわけではない。こんなラブホなんか。

陽夜君は、デビュー以来、一度も女性関係のスクヤンダルがない大変お利口な男なのだ。そういう男なのだ、陽夜君は。

そんな慎重な人が、こんな美人局に思える誘いに乗るはずがない。

「…もう帰ろうかな」

約束の時間は午後10時。時間は午後9時59分。

「やっぱり帰ろ…」

立ち上がろうとした瞬間、部屋の入口からピピっという電子音が鳴り、ガチ

ヤつと扉が開かれた。

「お前のぴよ君が来たぞ〜？」

やけに大きく膨らんだ鞆を持った大好きなベーシストがカモフラージュの帽子とマスクを取って、にやりと笑った。

「なんだその、『え？　ほんとに来た！』って顔は……。お前が連絡してきたんだろ？」

陽夜君がゆっくりとした足取りで、どんどん私に近付いてくる。私は一年ぶりの陽夜君との再会に胸がいっぱいになって何も言うことができない。

「『会いたいです。ここで待ってますう』って…、ラブホの住所送ってきて。

ぴよ君はびっくりでしたあ」

一年前と変わらない余裕のある喋り方。背中あたりまで伸ばされた艶のある黒髪。耳にはたくさんのピアスと、大きな手の爪には黒のマニキュア。シャツとスラックスというシンプルな服装が、陽夜君のスタイルの良さを引き立たせている。

「はあ、テレビの収録終わりに来たからちよつと疲れた。ほら、そっち、もつと詰めて。ぴよ君もソファに座らせてください」

ギシッと音を立てて陽夜君が私の隣に座る。

「ふう…落ち着いた…」

溜息を吐いた後、陽夜君が私に視線を向けてくる。細められた目で見られるのがくすぐったくて、私が「な、何？」と聞くと、陽夜君は「んふふ」と機嫌良さそうに笑った。

「ん？　ただお前のことじーっと見てるだけだけど？」

（お、落ち着かない…！ ドキドキする！ わ、私、こんなチヨロかった!?）
自分の心臓のドキドキが聞こえてしまうのではないかと恥ずかしく、体をずらして陽夜君から距離を取った。

「なんで離れんだ。一年ぶりだろ。もっと近くで見とけ」

「ひゃあ！」

すると陽夜君がさらに体を寄せてくる。

（ひ、陽夜君のいい匂いが…っ！ 久しぶりの生陽夜君の香りは刺激的すぎる…っ！）

なんだか少しでも触れるとセクハラになるんじゃないかと訳の分からないことを考えてしまっている間に、陽夜君が私の耳元に唇を寄せて囁いてきた。

「…ほら、このぐらいが一番いい。このぐらいが…、俺とお前の距離……だつたはずだろ？ なあ？」

「やっ…!」

「ほら、耳…、ふう〜」

「ひああ!」

突然耳に息を吹きかけられ、私は情けない程に顔を赤くして陽夜君から離れた。

「ひ、ひ、ひ、ひ、陽夜君!　だ、ダメだよ、こんなこと!　ひ、陽夜君!!」
叱りつけるように名前を呼ぶと、陽夜君は大して反省していないようで、ソファにふんぞり返っている。

「おい、遠すぎる。分かった分かった、もうふりはしないから。ぴよ君の隣に戻ってきなさい」

陽夜君が離れたしまった私を恨めしげに見て手招きしてくる。けれど、別に近づく必要なんかない。距離があってもお喋りはできるのだ。

（やっぱり一年ぶりの陽夜君に近付くのは危険だ…！ 距離をとつとかなないと、すぐにメロメロになってしまう…！）

「な、なんで戻らないといけないの？ この距離でもお話はできます…っ！」「なんでって…色々渡すものがある」

「へ？」

私が目を丸くしている間に、陽夜君は持ってきた鞆をゴソゴソと漁り始めた。

「ほい、この前出た情報番組でおすすめされてたチョコクッキー。これは、この前お偉いさんに貰った数量限定のワイン。これは、この前アンバサダーになったブランドの財布」

「え、えっと…」

次々に現れるなんだかとても高そうなプレゼントに、私は頭が混乱してし

まっていた。

「まだ色々あるんだけど、荷物になるかと思ったから今日はこのぐらいな？」
にっこりと笑う陽夜君の笑みがなんだか歪んで見えるのは気のせいだろうか。

「な、なんで…？」

——なんで私なんかになんかにたくさんプレゼントを…？

「なんでって…、一年ぶりだからだろ？　ずっとお前へのプレゼントが溜まって、一部屋埋まってるんだよ」

陽夜君がプレゼントを持って私に差し出してくる。

「こ、こんなの貰えません！」

そういうと陽夜君は無垢な子供ののようにコテンと首を傾げた。

「貰えない？　ああ……、そう…。知らない…訳ね…？　……へえ」

（なんか：陽夜君、顔：怖い？）

陽夜君がすうつと無表情に変わる。

「あゝつと、わかつ……た。んゝと、……じゃあ今日の用事は？ ……一年ぶりに連絡してきた理由、お前のぴちゃんに聞かせてください」と

陽夜君がごそごそとタバコを取り出し、火を付けると、ゆっくりと煙を吐き出す。とっても不機嫌そうな陽夜君だけれど、私に煙がいかないように、ちゃんと顔を背けてくれた。

「っゝ♡♡」

（ダメだ、やっぱり……メロついちゃう♡）

内心、キュンキュンしている私とは真逆に、陽夜君はとってもとっても不機嫌になっていく。

「……悪いんだけど、早くしてくれるか？ 忙しいんでね、予定が詰まってる」

陽夜君のひっくり声に私はビクッと体を震わせてしまう。

（ぐぐぐ、いい声…っ！ 陽夜君ってベースだけど、声もすぐくカッコいい…っ！）

体を震わせた私を見ても陽夜君は怖い顔のままだ。

「……怖い？ そうだなあ……俺の一番の古参ファンが突然連絡無視して音信不通になったと思ったら、一年後にまた突然『会いたあい』なんて言うてるから…、……もしかしたら、ちょおっただけ怒ってるのかもな？」

陽夜君がまたタバコの煙を吐き出す。

（ワイルドな陽夜君も……かっこいい…っ！）

久しぶりの陽夜君を堪能している私に陽夜君が畳みかけてくる。

「……好きな男でもできたか？ 彼氏か？ ライブ、必ず見に来てくれたのに。ぴたっと来なくなったな？ …あの日以降になあ？」

（好きな…男？）

めろめろゝんでバカになっていた私の頭によく陽夜君の言葉が入ってくる。私が反論しようとするが、陽夜君は苛立ちを隠そうともせずに矢継ぎ早に話し続ける。

「…今更何の用だ？ 俺は…てっきりまた前みたい…仲良く…一緒につて…思ってたのに…、そうじゃないだろ？」

「陽夜君…」

怒っているのに悲しそうに見えるのは、私の勘違いだろうか？

（そ、そうだ…！ 陽夜君に見惚れてる場合じゃない！ 私にはしないといけないことがある…！）

私はポケットに手をつ込み、自分のスマホを取り出してタップすると、事前にインストールしていたアプリを立ち上げた。

「お前が…また戻ってくるなら…物ぐらい、何でも買ってやると思っ…！」

物が欲しい訳でもないならなんだ？ ああ、…金か？ 金が欲しいのか？ 金があれば…お前、…また俺のファンに戻るの？」

（よし、もう少しでアプリが立ち上がる！）

スマホの画面に集中していると、陽夜君が怒り爆発寸前といった口調で吠えた。

「…なあ、さっきから俯いて黙ってるだけじゃねーか！ なんか言えっつ

…」

（よし、準備できた！）

私は勢いよくソファから立ち上がった。

「うおっ！ ど、どうした、いきなり立って…」

思いっきり緊張している私はゴクリと唾を飲み込み、無言のままソファに座

ったままの陽夜君の前に立った。

「ちよ、ちよつと怒りすぎたか？　で、でもな？　お前が突然連絡返してくれなくなったのが悪くないか？　お、俺は…ただ…その…」

「陽夜君！」

緊張で震える情けない声で名前を呼び、私はスマホの画面を陽夜君の眼前に突きつけた。

「んあ？　…なんだあ、これ？　スマホの画面…見ればいいのか？　なんだよ、これ……、催眠…アプリ…？」

陽夜君の頭の上に何個もクエスチョンマークが浮かんでいるように見える。私が陽夜君に見せたのは、最近ネットで噂の催眠アプリだった。何でも、「どんな人でも簡単に催眠にかかる大変お得な無料アプリ」らしい。歯が白くて肌が黒くて、とっても明るい笑顔を浮かべるスーツ姿の男の人が、ライブ放送で

激推ししていたのだ。何でも、数時間であれば「自分のことを好きにさせる」ことさえ可能な、それはそれは頭の良い人たちが作った、何とか賞レベルのとりでもない代物らしい。それを見た私は、すぐにそのアプリをダウンロードして、そしてその勢いのまま、陽夜君に、一年ぶりのメッセージを送ったのだ。

——初めての熱愛報道が出た陽夜君に。

（陽夜君に熱愛なんて…！ 陽夜君が…ほかの女の人と…なんて…！）

唇を噛んだ後、短く太い鼻息を吐き、気合を入れて、私は口を開いた。

「私の言うことを何でも聞きなさい！」

シー—ーンと部屋にが嫌な沈黙に包まれる。陽夜君は、呆れ顔で首を掻いていた。

「あゝつと…、言うことを何でも聞きなさいと言われても…。あの、なあ…。俺、…こういうのは効かないし、そもそんなバカみたいなアプリ、効く訳が…」

「私のこと恋人にして！」

陽夜君の声を遮ってずっとずっと言いたかったけど、言えなかったことを吐き出した。

——そうだ。ずっとこの人を独占したかった。ずっとこの人を恋人にしたかったのだ。

たとえば、それがひと時の夢であっても。

その瞬間、気だるげな陽夜君の体にビシッと芯が入った。

「かかった、催眠かかりました。はい、します。俺とお前は恋人、ラブラブ、

大好き、愛してる、結婚しよ」

「恋人にしてえええ！」

緊張と罪悪感と羞恥心でいっぱいになった私はぎゅうつと目を閉じて、陽夜君の顔にグイグイとスマホを押し付ける。

「んぶう！　そ、そんな押し付けなくても……うぐ……み、見えてるっ！」

「催眠かかってえ！」

「もうかかってるから！　お前の言うこと何でも聞くから！　恋人にする、というかもう結婚、結婚です、結婚します、結婚!!」

たとえ催眠がそうさせているとしても、陽夜君がいっぱい結婚と言ってくれるのが嬉しくて堪らない。

「陽夜君……っ！」

私が感極まっていると、陽夜君は小声で何やら呟いていた。

「うつそだろお……、恋人って…、なんだよ、ああ、もう、メロつく……！」

（なんか変……？　もしかして、まだ催眠が足りない!?）

「んぶ……！　も、もういい！　かかってるから、催眠、かかってる……！　押し付けるの……っ……やめなさい!!」

陽夜君がひんひんと悲鳴を上げ始めたので、流星にやりすぎたかと思い、スマホを離す。そしてしげしげと陽夜君の顔を眺めて、本当に催眠がかかっているか確認することにした。

「陽夜君……？　催眠……かかってる？」

すると、陽夜君はとっても上機嫌になって口角をグインと上げた。

「ん……？　かかっているか心配か？　なら……、ほら、命令してみたらどうだ……？　ぎゅってして……とか？」

ニコニコと笑いながら、陽夜君がとんでもなく魅力的な提案をしてくる。私

はゴクリと唾を飲み込んで、恐る恐る口を開く。

「ぎゅ、ぎゅってして……！」

「ぎゅう……♡」

「はひっ！」

（ほ、ほんとにしてくれたあ……！）

まさか本当にしてくれるとは思っていなくて、私が驚きのあまり身を振ると、陽夜君は少し不機嫌そうに顔を顰めた。

「なんでそんな慌てるんだよ。俺たち恋人同士だろ？　なあ、そうだろ？　お前が言ったんだもんなあ？」

「も、もちろん」

圧さえ感じる陽夜君の口調に、私はコクコクと何度も頷いた。すると陽夜君は満足そうにふむふむと頷き、私を抱きしめる腕にさらに力を込める。

「うひょお！」

「んふ…んふふふふふ。そっか、そっか、そっかあ。恋人かあ…んふふふふ、んははは、なんだよ、お前、もお。俺の恋人になりたかったのかあ？」
「っう、うん」

陽夜君の甘やかすような声が嬉しくて、そしてなんだか恥ずかしくて、私が顔を赤くして頷くと、陽夜君は「んぎゅう♡」と言って私のお腹あたりに顔を埋めてしまった。

「ああ、もうなんだよお。今日、どうしてやろうって思ってたんだぞ？ 金でも、物でも、脅しても何でも使って、俺から二度と離れられないようにお仕置きして…」

「陽夜君？」

反応がない。陽夜君が何かブツブツと呟いているが、小さすぎて聞こえない

のだ。

「お前のこと、もう逃がさないつもりだったのに。色々、手錠とか色々準備してきたのに……」

「陽夜君！」

「いでっ」

陽夜君が返事をしてくれないので、もしかしたら催眠アプリのせいでトランス状態みたいな感じになってしまったかと心配になる。慌てて脳天にチョップすると、陽夜君はデレっとした顔で私を見上げた。

「なんだあ？ 顔、上げて欲しかったか？」

その顔が、とつても優しくて、やっばりとつても好きだ。

「キスしていいですか？」

反射的にそんな言葉が出てしまった。慌てて否定しようとするが、それより

も早く陽夜君が身を乗り出してくる。

「キス？　キスしていいって言ったよな？　嘘じゃないよな？　ああ…嬉しいっ！」

陽夜君のお顔がドロツと溶けてしまうのではないかと思うくらいに喜びで崩れてしまっている。しかし、そんな陽夜君とは裏腹に、私は罪悪感に蝕まれていた。

（こんな…こんな素敵な笑顔の人に、催眠かけて、無理やり、私のこと、好きにさせるなんて…っ！）

本当にそう思っているのに、陽夜君が幸せそうな顔で私の体にスリスリ♡と頬ずりしてくると、理性があつという間に吹っ飛んでしまう。

「キスしたい」

（ああ、また…！）

催眠にかかっているのは自分の方ではないかと思うくらいに、すらすらと口から勝手に欲望に塗れた言葉が出てきてしまう。

「うん♡キスいいよ？　だって俺たち恋人同士だもんな？　ラブラブで一度も離れたことのない、ずっと一緒の恋人…、なんだもんなあ？」

「うん」

トロトロの声でそう言われ、私は即座に頷く。

（ダメだ、全然ダメだ、催眠にかけたのは私の方なのに…！）

「ん〜♡ちゃあんとぅんって言えて偉いなあ？」

陽夜君が私のことを褒めてくれるのが嬉しい。

私の心は罪悪感と、それ以上の「もっともつと陽夜君に言うことを聞かせたい」という気持ちでぐちゃぐちゃになってしまっていた。

（催眠、しっかりかかっているか確認して…！　そして、もっと…もっと…！）

「陽夜君は催眠にかかりました」

私の言葉を聞き、何かを察したのか、陽夜君はにいつと口角を上げた。

「うん、お前のぴよ君は催眠にかかっている♡催眠をかけたお前の言うことを、何でも聞かないとだめになってる♡だから、ほら、早く、チューは？」

「ぴ」

陽夜君がまるで子供のようにむちゅーつと唇を突き出してくる。

(す、すごい……っ！ イケメンのむちゅー顔って、こ、こんなに愛おしいの……!?)

心臓がバクバクどころの話ではない。

「……なあ。まだ？ 遅いって、なんでチューしてくれないんだ？」

陽夜君が拗ねている。

(ま、待って！ ちょっと待って！ ま、まだ……っ、し、心臓が……っ！ や、

破ける……っ！)

バツツツツクン！　バツツツツクン！

胸から飛び出てきそうな程に大暴れする心臓を落ち着かせていたのが気に入らなかったらしい。陽夜君は、私の耳に唇を寄せて、さらに追撃してきた。

「びよ君、ずーっと待ってるのに。焦らしてんのか……？」

「ばあっ!!」

(やめで!!)

心臓がそう訴えてくる。心臓が歓喜の涙を流しながら「わが人生に一片の悔いなし……」と動き止めようとしている。

「ち、近すぎるよっ!!」

いや、待って。ここで死ぬ訳にはいかないのだ。死なないで。催眠をかけてまでも、絶対に達成したい目的が私にはあるのだ。

生き残るには、陽夜君と距離を取るしかなかった。だが、私が死にそうにな
っている原因のスーパーメロ男は、もちろんそんなことを許してくれない。

「こおら、離れようとするな。俺とお前は恋人だぞ？　こーいーびーと？　分
かるか？　恋人っていうものはな、ラブホではずっと密着してる。知らないの
か？」

「う、嘘！」

「嘘じゃない。俺はテレビだのラジオだのなんだの出で、社会に揉まれてます
う。俺の方が物知りですう」

そう言いながら、陽夜君は私のことを簡単に持ち上げ、横抱きにしてしま
う。

「ひゃあ！　ちょ、ちょっと、待って、何で、お、お姫様抱っこ!？」

「なんでって恋人同士だから」

陽夜君の瞳には、一切の迷いがない。

(こ、これが…催眠！　すごい…こんなにもしつかりかかるものなんだ)

高性能な催眠アプリに感心している間に、陽夜君は私をベッドの上に降ろしてしまおう。

「よし、じゃあベッドの端に腰かけてな？　じゃあ、ちゅうっ♡」

「ひえ!？」

陽夜君のそれはそれは魅力的なキス顔に、私は思わずのけ反ってしまおう。そこで一気に陽夜君がムカムカし始める。

『え?』　じゃないないだろ？　キスだよ、キス、キス、キスです、キスキス！　キスしていいですかって言ったのそっちだろ?」

「す、すごい早口…!」

そう言っても陽夜君は止まらない。

「ほら、ちゅー！　ちゅー！　ちゅーうー!!」

「ひ、陽夜君…ま、待って、ちよっと待って…!」

　　またも心臓がバックバックと破裂しそうになり、私は胸を抑える。目を閉じて唇を突き出すそれはそれは可愛い顔でキスを待っていた陽夜君は、そんな私の行動に気付いてなかったようで、さらに不機嫌度が上がっていた。

「なあ、まだあ？　俺、待ってるんだけど？　恋人いつまで待たせんのっ？」

「あ、あ、ちよ、ちよっと待って…!」

　　けれど不機嫌真っ最中の陽夜君は全く待ってくれない。

「…あー、遅すぎてなんか催眠きれそう。あれ…？　俺って彼女いたっけ？」

「っ、だ、だめえ!」

「んむう♡」

（陽夜君が正気に戻っちゃう！）

私は必死になって陽夜君の顔を引き寄せると、その形の良い唇に自分のそれを重ねた。

（陽夜君とのキス…陽夜君の唇…陽夜君の…綺麗な…顔…っ！）

「ん…ふ……っんひゃあ！」

「ん…はあ♡」

自分があの大人気ベースト陽夜君にがつつりキスしていることに気付き、私は大慌てで顔を離してしまった。

「ん…？ 3秒…、今、3秒しかなかった…よな？ 短くないかあ？」

「もつと長かったよ！」

私が真っ赤な顔で抗議しても、陽夜君は足を組んでコテンと首を傾げるだけだった。

「いや、絶対3秒だった。人気ベーシストのぴよ君だから分かる、絶対3秒だった。やっぱり短い！ もう一回！」

「そ、そんな…！」

どこにでもいるようないたって平凡な顔立ちの自分にとって、神が作りたもうた美の化身の男に顔を近づけるのは、それはそれは勇気があることなのだ。それを陽夜君は全然わかっていない。

「ほおら…ちゅうっ♡」

「うう…ぐっ！」

私は意を決してまた陽夜君にキスをする。

「んう…ふう…んあ…ん…んう♡」

「ふ…ん…んう…ふ、んう…んふふ」

ちゅう♡と最後に陽夜君に唇を吸い上げられ、私は情けなく体をブルリと震

わせてしまう。

「はあ…はあ…、ひ、ひよ…く…ん」

「今のは…5秒あった♡…唇、やわらけえ…。指で…触っていい？」

「ひう♡」

いつの間にか私の耳に唇を当てていた陽夜君が胎の奥がきゅううん♡と疼く声で囁いてくる。甘やかすような柔らかい声で懇願され、私はただただ頷くことしかできない。

「いい？ ありがとう…」

陽夜君のいつもベースを弾いている大事な大事な指が私の唇にゆっくりと触れる。

「んっ…♡」

「ああ…ふにふに…柔らかくて…かぁいい…♡」

「ん…ふ…ん…んう♡」

(陽夜君の指が…スリスリ♡って…私の口…優しく…つくう♡)

ただ唇を撫でられているだけなのに、ゾクゾク♡と背中甘い刺激が走る。

それを陽夜君に悟られたくなくて、私は必死に荒くなりそうな呼吸を整えていた。

「あ…はは…、舌…出せる？　そうそう、指で、舌、触るな？」

「うあ♡」

恐る恐る出した舌に、陽夜君の指がにゆるう♡と絡み付く。

ぐちゅう…♡ぐちゅう…♡ぐちゅうぐちゅう…ぷちゅうう…♡♡

「は…え…う…んあ…ひ、ひよ、ぐ…んっ♡♡」

「舌まで小さくて、可愛い…はあ♡」

「ひ、よ…く…♡」

陽夜君の大事な大事な指が私の唾液で濡れて光る。恥ずかしくて、申し訳ないはずなのに、まるで陽夜君が私に染まっていくように感じられて、心の奥に隠していたはずの私のほの暗い気持ちがじんわりと浮き出てしまいそうになっていた。

(ダメ…っ♡これ、ダメえ…っ♡)

「ひよ…っくう…んむう♡」

「なあーあ？　なんで俺から離れた？」

「へ…あ？」

私が舌を弄られたまま返事をしようとする、陽夜君から「返事はしなくていい」と言われ、舌を指でぬる♡と挟み込まれる。

「舌、指でぐちゅぐちゅされながら、俺の話聞いとけ」

「んう…んう♡ふ…んうあ♡んう♡」

ぐちゅぐちゅ♡ぐちゅ…ぐちゅう…むちゅむちゅ…ぐちゅう♡♡

「ふぁ…あ…あぁあ♡♡」

陽夜君に舌をぐちゅぐちゅと犯されながら、耳元で甘く低く意地悪に囁かれる。体がビクビクと震えるのを止められないのが恥ずかしくて陽夜君から離れたいのに、陽夜君の声が、指が、視線が、それを許してくれない。

「一年前、一緒に飲みに行った日からだよなぁ？ 連絡くれなくなったの。…俺からの連絡、無視しだしたの」

「ふぁ…んう…♡」

陽夜君の目がすうっと細められる。

「人気がなくなつて嫌になった訳でもないだろ？ お前がいっぱい聞いてくれるって思うから、練習にも熱、入ってたし、テレビの露出も増えてた」

「んあ♡…ふ…うう♡」

苦しくなって舌を口の中にしまおうとすると、指二本でそこを挟み込まれ、ぬちゅう♡と引き出される。口を閉じることができないせいでダラダラと漏れ出す涎が陽夜君の指や腕を濡らしてしまっているが、陽夜君は全く意に介していなかった。

「月1で会ってたのに：いきなり連絡ブツチするなんてひでえよお…。俺が：どんだけ悩んだと思ってるの？」

「んむづう♡」

舌の表面を指の腹でぬとお♡と押し込まれ、私は自分の舌を見られている恥ずかしさに、思わずぎゅうっと目を閉じた。

「口から涎、漏れてる。舐めるな？ いいだろお？ いいよなあ？ だって、

俺、彼氏だもん…、お前の、彼氏、：だよな？」

(あ…陽夜君の舌…舌…♡♡♡)

肉厚でぬめぬめ♡と光る陽夜君の卑猥な舌がぬろおお♡と私の唇を這い、ぢゆるるる♡と涎を吸い上げる。

「ひぃい…ん♡♡」

「はあ…綺麗になったぞ？　んふふ…ん♡」

唇を親指で拭い、雄臭く、そして妖艶に陽夜君が笑う。

「じゃあ続けよっか…っと、ああ…いや、指はもういいや。直接舌で舐める」

「直接…舌…？」

「あはは。分かんない？」

指で挟み込んだ私の舌をまたツン♡と軽く引つ張った後、陽夜君の顔が近付いてくる。

「キスってことだよ」

「つ、ま、待って、陽夜、く…んうう♡♡」

「んあ…んうう♡」

ぢゆるううう♡ぢゅうう♡ちゅう♡ちゅう♡ちゅう♡ちゅう♡ちゅう♡ちゅう♡

(やあ…あ…♡キス…深い…陽夜君の舌が…にゆるう♡って入ってくる…♡お口の中…陽夜君でいっぱいになっちゃう…♡)

舌を絡められたり、齒列の裏をぬるう♡と撫でられたりすると、また体に甘い疼きが溜まっていく。今まで感じたことがないその感覚が怖くて身を振っていると、陽夜君がキスをしながらまっすぐに私を見つめる。

「こおら…んう♡逃げるな…んう♡」

ぢゆるるるるうう♡ぢゅうう♡ぢゅううう♡ぢゅう♡ちゅう♡

「ふ…う♡…んう♡う♡んう♡ふ…んううう♡や…あ…陽夜、君、ぎゅう、やだあ…んう♡」

「んう……ふ……んう！」

キスで感じてしまっている私の顔から視線を少しも逸らさず、陽夜君が私の体を羽交い絞めにする。

「羽交い絞めが嫌？ 何言ってるんだよ、恋人同士なんだぞ？ 嫌な訳ないだろ？ ほら……もう一回、キス……♡」

「っ、も、もう、やだあ！」

「んぶっ！」

ジタバタと暴れて何とか腕だけ自由になった私は、思わず陽夜君の顔をグイッと押しのけてしまった。

「んう……、もう！ なんだよお、酷いぞ、酷い酷い！」

最初、目を丸くしていた陽夜君が思いっきりむくれた顔へと変わる。おして子供のように拗ね始めてしまった。

（い、いかん…こ、このモードになった陽夜君は…!）

何とか声をかけてあげたいのに、キスで乱されてしまった私の呼吸はまだ整っていない。はあはあと息を吐いている間に、陽夜君は「もういいです！ 拗ね拗ねモード」に突入してしまった。以前、私がほかのインディーズバンドがかっこいいと言った時にもこのモードに突入してしまい、機嫌を取るのにかなり苦労した覚えがある。

「ひ、ひよく…」

「俺、恋人なのに、手で押しのけてあっち行けっしてたなあ！ もう知らねっ！ ふーーーーんだ！」

「ああ！」

陽夜君はとうとう私に背を向けてしまった。

「なんだよ…もういいですよ。ちゅーしなくていいです。終わりでいいです」

「…ふふ」

私よりずっと身長も高く、体格も良くて、年上の陽夜君が私の言動でこんなにも乱されている。

(可愛い…)

「なんだよ…彼氏になってくれて言うからさあ。俺、期待してさあ？ あんなこととか…こんなこととか…、色々さあ。なんだよなんだよ。やっぱりお仕置きする、絶対、必要だ、これは」

陽夜君はなにやら小さい声でブツブツと呟きながらベッドから降りると、ソファの近くに置いてある鞆の前に行き、しゃがみ込んだ。

「手錠、やっぱり必要だったな…買ってきて良かった…。確か…、鞆の奥の方に入れて…」

鞆の中を何やらごそごそと漁っている陽夜君にゆっくりと近付き、しゃがみ

込むと、私は陽夜君の背中をツンツンした。

「陽夜君、陽夜君、ひーよーくん？」

「…ツンツンしてもだめだ」

声がいっきりに拗ねている。

ツンツン。

「可愛い…、ねえ、陽夜君」

「もう俺、怒ったの。せつかく仕事終わりに飛んできたのにさあ、俺。ルンルンでスキップしてた俺、バカみたいじゃん…」

ツンツン。

「陽夜君、陽夜君、びーよーくん？」

ツンツン。

「ああ、もう、ツンツンしない！ ツンツン禁止！ …びよ君とキスするの嫌

なんだろう？」

とうとうツンツン禁止令が出されてしまった。

——それならば、次の手…！

「えい」

ぎゅう。

「んっ♡♡」

思いつきりその広い背中に抱き着いた。

（い、いいよね？ 今は恋人同士なんだし！）

「びょくん…」

私は抱き着いたまま、スリスリ♡と頬ずりまでやってみた。

「後ろから抱き着いても、ダメ…だ。スリスリしても…ダメ…」

大分効いてきている。多分あとちょっとだ。インディーズバンドよりも、陽

夜君のバンド、ひいては陽夜君の方が何億倍もかっこよくて大好きなことを1時間かけて熱弁した時に「ふう〜ん、俺のこと、そ、そんなに好きなんだあゝ」と鼻の下を擦っていた時の陽夜君と同じ声音になってきている。

もう一回とどめのスリスリをしてあげると「ああ…うう…」と可愛い声をあげて、ブルッ♡と体を震わせてくれた。

「こっち向いて？」

「そっちは向かないです」

怒った猫みたいだと思ったところで、私はふと、今、陽夜君は催眠にかかっていることを思い出した。

「あれ…？ 陽夜君、催眠、かかってないの…？」

びくつと跳ねた陽夜君は「ああ、そうだった、くそっ！」と何やらまたブツブツ呟き、「はいはい、向きます。向きますよーだ」と渋々振り向いてくれ

た。催眠はちゃんと効いてるようだが、まだふくれっ面のままだった。

「…なに？ そんなジーツと見て。この顔、嫌なんだろう？」

ぷりぷりと怒っている陽夜君は、まだブツブツ言っている。

「どれだけ女がキャーキャーいつてる顔だと思って…」

むかつ。

「んっ！」

「んう!？」

私は陽夜君の顔を掴んで引き寄せると、その唇に勢いよくチューをかました。

「んう♡…ふ…んう♡」

「ん…ふ…んう…はあ…はあ…、キス？ んう♡」

目を見開き、私のキスを受け入れている陽夜君に、またむちゅーと唇を押し

付ける。

「ん…んう！　はあ…ええ、もう…なんだよお…んう♡」

思い切って陽夜君の口の中に自分の舌を入れて、深いちゅーにしてあげると、陽夜君はびくう♡と体を震わせた。

「怒らないで？」

はあはあと息を荒げる陽夜君に至近距離でおねだりしてみる。

「んう…♡ん…いやだあ…んう…怒る…んう♡」

「んう♡」

いやいやと首を緩く横に振る陽夜君の顔をまたがつちりと掴んで動けなくすると、さらに深く舌を絡めてみた。

「やだ…怒る…っんう♡…んうう…ふう♡俺、まだ怒ってえ…んうう♡♡」

「んう♡怒らないで…え…陽夜君…びくうん♡んう」

ぴよ君と呼んであげると陽夜君の体がまたビクビクう♡と跳ねあがる。

(私のキス…喜んでくれてる…♡嬉しい…嬉しい…♡)

「んう…ふあ…んんん…♡んん…もう！ 分かった、分かったからあ♡怒らない…♡んう…♡怒るの…やめるからあ♡」

「んう…えへ…へ…ぴよ君♡」

最後にちゅう♡と唇を一吸いして離れると、陽夜君のお顔はとろろ♡と蕩けてしまっていた。

「陽夜君…?」

「はあ…はあ…♡ああ…やっぱ…、すげえ、すきい…♡♡」

「えへ…えへへ、催眠すごいっ…♡」

陽夜君が私のことを好きと言って、大好きって顔をしてくれる。それが嬉しい。たとえ、それが催眠の効果だったとしても。

（ああ、どうしよう。言っていないかな？ でも今言わないと、絶対言えないし、催眠が解けたら、絶対やってくれないし、私、セクハラで訴えられるかもだし！）

——もう、今しかない！

「つと…ち、違う…。ダメだ…、ちゃんとお仕置きを、しないと…！」

「陽夜君！」

「あのなあ、俺、まだ怒って…」

「オナニーして！」

「はいいい？」

陽夜君の声が裏返るのなんて初めて聞いたかもしれない。

「今、その可愛いお口で俺にオナニーしろって言ったんですか？」

「う、うん…」

へらつと笑うと、陽夜君がぎゅうつと自分の心臓あたりのシャツを握り込む。

「ねえ、ちょっと！ 可愛い顔やめて、照れないで、ぎゅんぎゅんくる！」
「オナニーしてほしいの……！」

——催眠中なのだ。陽夜君は私のために何でもしてくれる。なら、ちょっとくらいハメを外してみよう！

「うあ……。乱される……くそ、そうだった……、こういう子だった……。こうやって俺のこと、すっげえぐちゃぐちゃにしてくる子だった……」

陽夜君は頭を抱えてしまっている。

「やっぱり……ダメ？」

胸の前で両手をぎゅうつと握り込みながら尋ねると、陽夜君はカッと目を見開く。

「ダメじゃない。できる、できます」

「うわぁ…催眠、ほんとすごい…!」

「催眠ってすごい♡じゃねーよ! ただ俺が死ぬ程お前が好きただけだよ!」
また陽夜君がブツブツ言っているけれど、念願の陽夜君のエッチな姿を見せてもらえるのが嬉しくて、私の耳には入ってこなかった。

「くそ…くそお…っ! すつつっげえ、えげつないオナニーみせてやるからな!」

陽夜君はベッドの端に座るとビシッと床を指差す。

「お前は床に座りなさい」

「う、うん…」

（どこの…床? オナニーするなら、あんまり近くだと気が散る…かな?）

色々考えた私は、陽夜君から3メートル程離れた場所にストンと体育座りを

した。

「遠い！　遠すぎる！　そんなところじゃ俺のちんぽ見えないだろうが！　こつち！」

「あ……う」

陽夜君の目がキッと吊り上がっている。なんだかすごく怒っているように見えて、私は慌てて立ち上がり、ちよつとずつ陽夜君に近付いていく。

「そう、もっと、こつち、まだ近く！」

「ここ……？　こ、こんな近くでいいの……？」

陽夜君の長い両足の間までやってきて、尋ねる。

「そう！　俺の足の間！　床に……そうペタンて座れ！」

「こ……こうですか？」

「はい、それでいいです」

（ひ、ひ、陽夜君の股間が……すぐ目の前に……！）

じわじわと顔が赤くなっていくのが恥ずかしい。陽夜君はそんな私を見てニマリと笑うと、ゆっくりとズボンのチャックを下していく。

「なあと照れてんだよね、お前がオナニーしろっていったんだろ？」

「そ、それは言ったけど……っ！」

（実際にしてくれるとなると……ま、また心臓が……！）

落ち着かないという気持ちとは裏腹に、顔はどんどん赤くなり、心臓の鼓動もどんどん早くなっていく。

「もじもじしない！ 可愛いから！ ビシッとする！」

「でもお……びよくうん……」

自分でも情けないと思うような声が出てしまう。

（私が頼んだのに……！ もっとしっかりしないとイケないのに！ でも……でも

…！)

「びよくうん…」

「くうくう♡」

陽夜君が顔を手で覆って天を仰ぐ。

「そんな目で見ないのお…！」

陽夜君がスリスリ♡と私の顎を撫でてくるのが気持ち良くて、ぴくっ♡体が跳ねてしまう。

「もう…もう、もう！　なんだよ、怖くなったのか？　ぴよ君のエッチな姿、見たいんだろ？　それとも、男のオナニー見るの、気持ち悪くなったのか？」

「ぴよ君…んう♡」

こしょ♡と顎を指で優しく引っ搔かれると、変な声が出てしまう。

「っく、ああ、もう!!　俺のオナニー見るの、見ないの、どっちなの！」

「見たいよお…」

「見たいんかあい…」

ガクツと脱力した陽夜君が、艶やかな長い黒髪をかきあげて優しい顔で私を見つめる。

「分かったよ…ほら、全部ゆっくりしてやるから」

「うん、ありがとう陽夜君」

そう言うのと、陽夜君の声がさらに甘くなる。

「パンツからは、出しているの？ ダメ？ 待つのか？」

下着越しでも分かる程に陽夜君のそれは。

「おっきい…」

「おっきい…とか言わないの。もっとおっきくなっちゃうでしょ？」

陽夜君が私の頬をツンツンと突く。

「…下着の上から触ってみます、お嬢さん？」

「う……」

陽夜君の甘いお嬢さん呼びは卑怯だ。何も言えないままコクリと頷くと、陽夜君は私の手を優しく握り、すでに勃起しているちんぽの上にゆっくりと乗せた。

「どう…？　これが、俺の、おちんちんです」

「ひえ…す、すごい…」

スリスリ♡とそこを軽く撫でみると、陽夜君の眉間にぐうつと皺が寄った。

「まさか、ほかの男のやつ、触ったことないよなあ？」

「あ、ある訳ないよお…」

「よし、ないな！」

声が大きい。

「いい子だぞ、じゃあおちんちん触るの、ぴよ君が初めてだな？ うん…いい子♡」

「ひあっ♡」

陽夜君が私の手を上から握り込み、上下に動かし始めてしまった。

「んう…♡はあ…んっ…くう…っ♡」

「ま、待って…私、ただ、見せてくれればいいだけだから…！」

（陽夜君の…固くて、熱いっ♡火傷、しそう…♡）

「やだ、陽夜君、おてて、外して？ やだ、やだあ…！」

自分の手を引き抜こうとうすると、ぎゅう♡とさらに強く握り込まれてしま
う。

「こおら、だめ…だぞ、勝手に、触るのやめちゃ…んう♡触ったこと…んう、

はあ、ないんだろお？」

「うあ…♡」

気持ち良さそうな顔で気持ち良さそうな声を出す陽夜君のあまりの色づきさに、私はもじもじ♡と足をくねらせてしまう。

「じゃあ、恋人の…ぴよ君ので、男が、どこ触られたら気持ちいいか、覚えな
いとだろお…？　くう♡」

にゅちゅう♡にゅちゅう♡にゅちゅう♡にゅちゅう♡にゅちゅう♡

「あ…あ…あ…」

（すごい…すごい…すごい♡今まで見たどんなものより…えっちい♡）

「はあ…、くそ、きもちい♡下着越しでもこんな、興奮するなんて…♡ああ、
俺、どんだけ好きなんだよお…♡」

にゅちゅう♡にゅちゅう♡にゅちゅう♡にゅちゅう♡にゅちゅう♡

「あ…陽夜君、音、音、エッチだよ？ 待って、もういい！ もういいからあ！」

私が足をもじもじさせながら必死に訴えていると、陽夜君がにんまりと笑った。

「ん？ どうしたあ、そんな、足、モジモジさせて…？ んはは…、お顔、赤くなってる」

「っ♡」

スリ♡と陽夜君が可愛く頬ずりしてきた後、耳元でゾツとする程に甘い声で囁く。

「びよ君のオナニー見て、お前もしたくなっちゃった？」

「違う！ 違うよ！ 違うもん…！」

必死に首を横に振ってみても目の前の人にはお見通しだった。